

虹の素

「暗いからみえる」

作：桜木想香

小守 康平 (22) 箱根ランナー。実業団に就職内定している。
小松 紫乃 (22) 康平の彼女。大学の同期。

伊澄 ゆかり (22) 康平の高校時代の彼女。女優。

雪の夜。静かで暗い住宅街に煌々と蛍光灯の明かりが点っている。
大学4年。冬のコインランドリー。2人の男女が来る。
乾燥機を開け、中身を確認する。

紫乃 どう？
康平 もう10分だけしていい？
紫乃 いいよ。

康平、ポケットからサイフを取り出す。
康平 うわ小銭ないじゃん。
紫乃 ありや。私も持ってないかも。
康平 なんか飲む？
紫乃 午後ティーあるなら午後ティー。
康平 あるよー。

康平、「午後の紅茶ミルク」と「FIRE 挽きたて微糖」を持って来る。
康平 はい。

暗いからみえる

暗いからみえる

紫乃

ありがとう。

紫乃、受け取りキャップを開け、キャップの裏のシリアルコードをスマホで入力する。康平、小銭を乾燥機に入れ、ベンチに腰掛ける。

康平

なんか集めてんの？

紫乃

うん。ブランケットかミトンもらえる。知ってる？伊澄ゆかりが出て

康平

るCM

ああ。

紫乃

めっちゃ可愛いよね〜私と同年とか信じられない。あのCM好き。

康平

そっか。

紫乃、シリアルコードを入力し終わる。

康平

それで。ここで続き話すでいいの？

紫乃

うん。

康平

別れんの？俺ら。

紫乃

その方がいいと思ってる。

康平

なんで？

康平

ごめんこんな聞き方しかできなくて。

紫乃

ううん。

康平

これってあれだよ、前から別れたいって思ってたってことだよ。

紫乃

え違うよ。なんで？

康平

箱根終わるまで言わないでくれてたってことでしょ？

紫乃

いやううん。そういうわけじゃない。けど、言っていないことはあった。

康平

なに。

紫乃

私就職しない。

康平

……ん。

康平

そんで。

紫乃

演劇の専門学校に行く。

康平

演劇？

紫乃

うん。

康平

え、それってもう決まってるってこと？

紫乃

うん。

康平

受験してたんだ。

紫乃

うん。

康平 メディカルトレーナーにはならないってこと？
紫乃 そのつもり。

康平 資格も取ったのに？

紫乃 うん。

康平 まあでも資格があればやろうと思えばいつでもできるのか。

紫乃 いや多分無理かな。新卒以外で現場経験ないと採用厳しいから。

康平 ああ。

紫乃 まあ別に、保険にするつもりもないから。

康平 そう。

紫乃 やっぱ演劇やりたくなっちゃったんだ。

康平 ねー。ほんとにねえ。バカだよねえ。

紫乃 ーでもまあ、進路が決まってるならよかった。

康平 ごめん黙ってて。

紫乃 えいつから？

康平 いつからって？

紫乃 いつ決めたの、演劇やるって。

康平 夏くらい。

紫乃 そんな前。

康平 ごめんね、私のことで余計な心配かけたたくなくて。

紫乃 いや心配はしてたよ。就職決まんねーし相談もしてくれないし、他に男できたのかって思った時もあつた。

康平 ないないそれはないほんとにない。

紫乃 ごめん。ほんと、色々。

康平 違うの康平別に悪くないから謝らないで！

紫乃 いやでも俺もちよつとやつぱ放置というか気にしてあげられなかった

康平 それは私が隠してたからいいの！

紫乃 いやでもそうやって気を遣わせちゃってたしそれで疑ったりもしましたし
ごめん。

康平 いやだからなんで紫乃が謝るんだよ。

紫乃 疑わせるようなことして。

康平 いや違う勝手に疑っちゃったのは俺だから俺が悪いの。

紫乃 違うの康平は悪くないの言えなかった私が悪いの。

康平 でもそれは俺に聞く余裕がないって思ったからでしょ。だとしたら俺に余裕がないって思わせちゃってたんだから俺がごめん。

紫乃 もーなんでよ！私は康平に余計なこと気にしないで箱根終わるまでは

康平 走ることだけに集中して欲しかったの！

紫乃 ありがとう！！お陰で区間賞とれました！

康平 おめでとー！

紫乃 はい紫乃先生！話を戻していいですか？

紫乃　なにそれ。うんそうしょ。
康平　ここまでの話と別れようが俺的にはぶっちゃけつながりません。
紫乃　うんだよね。
康平　はい。

紫乃　なんかさ、すごいかつこよかったんだよね。康平。
康平　んんんはい、ありがとう。

紫乃　ちゃんと結果も出してさ、就職も、実業団行ってこれからも走っていきじゃん？に対してさ、私はまあ、自分で決めたことだから当たり前なんだけども、いわゆる振り出しに戻るじゃん。いやまあそれが嫌だったら就職してメディカルトレーナーになればいいだけなんだけどもさ。うん。

康平　ちよっとね、本当に大丈夫なのかなって思って。専門行ってもさ、みんな年下だからさ、そういう意味でも既に出遅れてるわけだし。それでも演劇したいって思っただら。
紫乃　まあね。

康平　じゃあいいじゃん。

紫乃　うん。わかってる。その分頑張ればいいだけだし。
康平　うん。

紫乃　それでもね、わかってるんだけど、本当はすごく嬉しいんだけど、でもやっぱりね、康平がちゃんと結果出してるのが羨ましくて。
康平　うん。

紫乃　んーっていうか、悔しいっていうか、焦るっていうか、まぶしくて見れないっていうか。このまま一緒にやっていける自信がなくなった、っていうのかな。演劇やるって決めたからには死ぬ気でやらなくちゃいけないし、やるつもりだし。康平も新しい環境になって大変だと思ってるんだけど、でもこれからはそういう時にたぶん助けてあげたりとかできないし。
康平　うん。

紫乃　だからなんていうか、自分のためだけにがんばりたいっていうか。んーいやなんかこれもちよっと違うんだけど、んー、そんな感じ。
康平　うん。

康平　そっか。
紫乃　はい。

康平　俺さ、高校生の時、伊澄ゆかりと付き合い合ってた。
紫乃　え？え！？ええええ！？伊澄ゆかりってあの？これの？
康平　うん。

紫乃　えええ嘘でしょまじで？えなんで別れたの？え待ってそれでなんで私と付き合ったのえなんかごめんささい。

ちよつと待つて。

えーてゆうかなんで言うてくれなかったの。

こうなるからだよ。いいから落ち着いて聞けつて。

康平 まあ、でね。ゆかりと別れたの卒業式の前日んだけど、遠距離だったのね。あいつ大阪の大学だから。

紫乃 そうなんだ。

康平 まあそんな時に色々話して、まあ、遠距離恋愛する自信ないよねつてなつて。お互い。まあお互いがんばんなきやいけなかつたし。

紫乃 えーもつたいない。

康平 まあ続けようと思えば続けられたかもしれないけどね。お互い嫌いになつたとかそういうわけじゃないし。まーでも実際、今になつて思うのは、まあ無理だつたらうなつて。会いに行く時間なんてマジでなかつたし、お金もね。かといつて連絡だけとつてもつた感じだし。

康平 俺ね。高校生の時本当に自分に自信がなかつたの。マジで。でもまあ向こうから告つて来たんだけど、普通にうれしかつたし。まあ正直結構劣等感とか感じてたんだけど。最後の大会とか俺怪我して出れなかつたのに向こう全国行つちゃうし。

紫乃 あああそうじゃんうちの代の全国！そつか演劇部！でてたんだ！うわあ。そつかその頃からすごかつたのか。えーまつてそれで自信ないつてどういうこと？

康平 な。こつちの方がもつと自信ねえわ！つて思うじゃん。

紫乃 うん思う。

康平 まあでもね、そんな人にさ、好きつて言つてもらえてさ、それはやっぱり、俺の自信にもなつたわけ。だし、この人にふさわしい男にならなきやつて頑張れたのもあるし。

紫乃 うんうん。

康平 まあ結果ね、そこまでなれなかつたしだから別れたんだけど。自分のことでもいいいっぱいだったし。お互いね。だから次は、もつとちやんと、支えられるような男になろうつて思ったの。一応そのつもりで今までやつて来たんだけど。いやぶつちやけ支えてもらつてばつかりだつたけど。

紫乃 ううん。

康平 だから何かつて言うよ！今度は俺が！支えていきたいつて思うのね！それこそゆかりと付き合つてた時は、そんなことできる自信なかつたし実際できなかつただろうし。でも今なら、できるつて思つてる。

紫乃 うううううううう

康平 いや紫乃がね、本当に俺と別れたいつて思つてるんだつたら、それは仕方ないと思う。けど聞いた限りだとそうじゃないつて思つたから。

紫乃、抱きつく。支える康平。

康平　がんばろう、一緒に。頼りないかもしれないけど。
紫乃　私泉ゆか越える。
康平　（うなずきながら）紫乃先生。乾燥機終わりましたので帰りますよ。
紫乃　はい。

康平、乾燥機から洗濯物を取り出す。

紫乃　あったか〜。

ね。

紫乃　えーねえ泉ゆかの話聞きたーい聞かせてー。

康平　お前元カノの話聞きたいの？

紫乃　超えなきゃいけない相手だからね。仕事も恋も。

康平　はいはい。

紫乃　なんかもらったものとかないの？

康平　えーそれ言ったら俺が使ってる定期入れゆかりからもらったやつだよ。

紫乃　はい帰ったら捨てる！

早足で歩き出す2人。ふかふかになった気持ちと洗濯物が冷めないうちに。